

特色ある学校

キャリア教育への取り組み

(元) 徳島県立阿南工業高等学校長 吉田一紀
 (現) 徳島県立徳島東工業高等学校長



1. はじめに

本校では2003年度から、学校の活性化を図る目的で「自分モードへシフト」をキーワードに学科再編を行った。この再編は、産業構造の変化・技術の高度化・情報化・国際化などの急速な社会の変化に対応するとともに、生徒一人ひとりが自ら考え、判断し、自ら学ぶ「生きる力」を育むことをねらいとするものである。この詳細については、昨年10月に開催された全国工業高等学校長協会第51回研究協議会大阪大会及び産業教育振興中央会誌「産業と教育」11月号において発表したため省略するが、本稿のキャリア教育は本校学科再編の中核となるものである。

欲・関心、勤労観・職業観、コミュニケーション能力や社会生活マナーなど、社会人・職業人としての資質・能力の低下が指摘されている。本校では約60%の生徒が就職し、進学者も将来何らかの職業に就くことを考えると、高校在学中に、社会人・職業人として自立するために必要な能力や態度の育成が、社会の各方面から求められている。本校では、生徒の「自立」を支援し、生涯にわたるキャリアを形成する基盤を培うことを目的として、「人づくり」、「基礎学力」、「ものづくり」の三つの柱を中心に据えた図1のような独自のキャリア教育を推進している。

3. キャリア教育の目標

(1) 働くことの意義

2. キャリア教育の必要性

今日、生徒の進路に関わる環境は大きく変化している。こうした中、生徒が「生きる力」を身に付け、直面する課題に柔軟に対応でき、社会人・職業人として「自立」するための教育が求められている。

また、生徒の資質に関わる課題として、働くことへの意

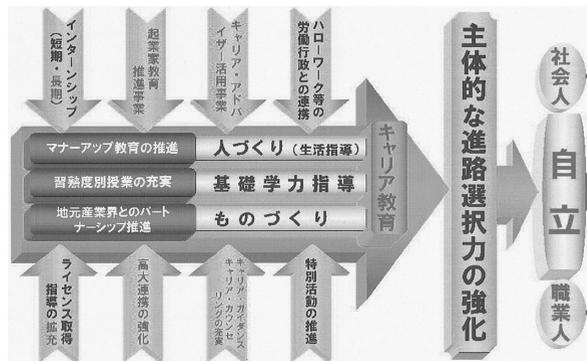


図1 キャリア教育システム図

キャリアは、自己と働くこととの関係の上に成立するものである。働くことは、報酬を得て生計を維持するだけでなく、身体を動かして額に汗する苦労や厳しさを通してしか味わうことができない成就感や自己実現の喜びがある。

また、一市民として社会に参画し社会を支えることに意義がある。キャリア教育においては、このような意義を生徒に理解させることが大切である。

(2) 自立意識の育成

キャリア教育を進めるに当たっては、他者の思い、苦労、誇り、心の痛み等を、自分のこととして感じることでできる豊かな人間性を育てることが大切である。

また、人々との交流や体験を通して、自分自身への自信や有用感を持たせる指導も重要である。

4. 本校のキャリア教育の特色

本校では、生徒一人ひとりのキャリア形成や自立を支援するため、生徒の適性・能力、進路希望、目的課題に応じた教育活動を展開している。各教科・科目、総合的学習の時間(課題研究)、特別活動など、すべての教育活動を、次のとおり実施している。

(1) 自立できる生徒の育成

生徒指導、マナー指導、ライセンス取得、基礎学力の定着指導を通して、社会人として自立できるスキルを身に付けさせる。

(2) 個別の進路アドバイス

進路適性検査(職業レディネスなど)や進路カウンセリングを実施し、生徒の適性能力、進路希望等、個別対応の充実を図る。

(3) 幅広い進路目標へ対応

就職から進学まで、幅広い進路先に対応した適切なアドバイスと弾力的対応の充実を図る。

(4) 地域との連携

地域の教育資源を最大限利用して、企業見学、生徒の企業訪問、進路ガイダンス、高・大連携事業、進路セミナーなどを実施し、校内では得られない交流・体験活動の充実を図る。

5. キャリア教育への取り組み

(1) 各学年の年間計画

1年次では、コース選択の指針となるガイダンス科目(総合技術・工業技術基礎)の学習を通して、自己の生き方や将来の進路を見つめながら、「働くこと」への関心・意欲と学習意欲の向上を図っている。

2年次では、短期インターンシップや修学旅行時の企業・大学見学を通し、自立心や豊かな人間性を育てている。

3年次では、希望生徒による長期インターンシップや企業・大学見学などの体験活動や各種セミナーの開催など、産業社会の実際を学習することにより、職業人としての資質・能力を高めている。

また、3年間を通して、精神力・体力アップを図るため部活動への積極的参加を呼びかけるとともに、ボランティア活動の推進、社会人マナーやコミュニケーション能力の育成など、社会人としての基礎・基本を身に付けさせている。

6. 取り組みの実践例

(1) 本校のデュアルシステム

本校では、インターンシップを充実・発展させ、3年生の希望者には、長期間(半年または1年間)にわたり生徒を企業に派遣して実習させるなど、実務と教育が連結した実践的な専門技術の向上を図る人材育成システム(デュアルシステム)を導入している。これにより、産業界とのパートナーシップを築いている(写1、写2)。

(2) 産業財産権教育



写1 地元企業での実習1



写2 地元企業での実習2

総合技術の授業を通して産業財産権を含む知的財産権の意義と内容を学習し、特許に関する知識を身に付けるなど特許マインドを養っている。

(3) 生徒自身による企業訪問

生徒自らが企業とアポイントメントをとり、企業訪問をすることにより、働く意欲を喚起させるとともに職業的自立を促している。また、これにより就職のミスマッチを防止し、離職者の減少を図っている。

(4) キャリアアドバイザーの活用

企業の人事担当者や関係機関等をキャリアアドバイザーとして学校にお招きし、生徒、保護者、教職員が参加するセミナーを開催している。生徒は勿論、保護者、教員にとっても、職業の実際や経済状況、企業が求める職業人としての資質や能力等を知る貴重な機会を得ている。

(5) 起業家教育の推進

生徒の職業意識を喚起するため、経済界からの協力を得て、模擬株式会社「鉄男」を設立している。「鉄男」は、機械科の3年生の一人が社長を務め、役員も社員も機械科3年生（代表取締役1名、社員9名、発行株数60株、1株500円）で構成されている。業務内容は、本格的な製法による「そり金」や「フラワースタンド」、「ルームスタンド」などの製造・販売となっている。社長及び社員が、地域近郊の販売店に販売委託や市場ニーズ調査を行い、商品の改良を行った結果、売れ行きは予想以上のものがあつた。この体験を通して、職業や仕事についての理解が深まった。勤労観・職業観の形成、自己の可能性・適性など多くの成果を得た（写3、写4）。

(6) 有効なライセンスの取得



写3 そり金の製作



写4 フラワースタンド販売



写5 フォークリフト講習

即戦力につながる有効なライセンスとして、パワーショベル、クレーン、アーク・ガス溶接、フォークリフト、玉掛などの取得を目指した講習会を開催している。また、ライセンス取得に関連した建設機械等の導入を図り、より実践的な実習を行っている(写5)。

(7) 高・大連携

複数の工業系大学との間で、本校生徒の大学での授業聴講や大学からの「出張講座」等の実施など、高・大連携に取り組んでいる。専門的な学問への興味・関心を高め、大学卒業後の進路や職業について、考えさせている。また「大学卒業者等就職情報システム」を構築し、希望者には地元企業などの求人情報を提供している。

(8) 短期インターンシップ

平成13年度から、2年生全員を対象に、地元企業、役場、郵便局など41事業所の協力を得て、3日間のインターンシップを実施している。3月には、協力先企業の担当者をお招きして成果発表会を行っている。地元新聞にも取り上げられ、地域社会から高い評価をいただいた。何よりも生徒の職業に対する意識が高まり、学習に対する意欲が増している。

7. 職員研修

社団法人徳島ビジネス協会をはじめ、時代をリードする起業家、経営者、有識者を講

師として招き、体験談や経済展望などについての講話を聞き、職業観や起業家マインドについて、職員の意識を高めている。

また、徳島市の「アスティとくしま」で開催された四国内の200あまりの企業、大学、団が参加する「徳島ビジネスメッセ2003」に本校職員も出向き、起業家のための基調講演やパネルディスカッションへの参加を行い、キャリア教育の実践に必要な知識の習得に努めた。

8. おわりに

現在は、産業界ばかりでなく、学校もグローバル社会に組み込まれつつある。これからの教師は単なる教科指導だけでなく、企業・地域社会・NPOなどと協力しながら、今後の社会を支える人材を育成するコーディネーターとしての役割が必要である。

キャリア教育を推進する上で、すべての教師がキャリア教育に関して、本質的な理解をすることが大切である。全ての教育活動の取り組みが生徒のキャリア形成にどのように反映し、効果があるのかなどについて、評価・検証・改善を繰り返しながら進めることが不可欠である。

これからの学校は、生徒に多様な学習機会を提供し、自らトライするチャンスを選択させ、自らの人生、自らのキャリアを考えさせるシステムを創ることが重要である。

キャリア教育は、進学・就職指導といった狭い範囲の教育ではなく、自己の在り方や生き方の問題として捉えることが肝心と考える。